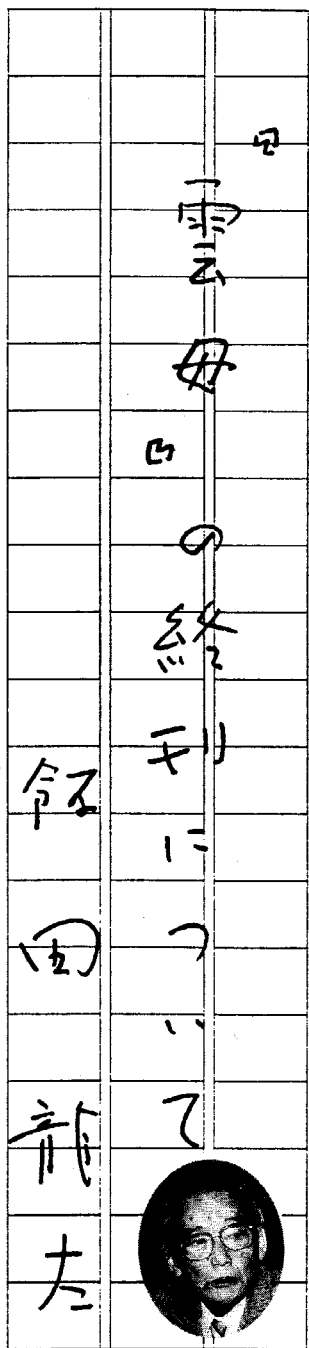




『雲母』は、来る平成四年八月号をもって通巻九百号を迎えることになりました。発刊から七十七年の歳月を閲したことになりますが、併せて十月三日は、飯田蛇笏歿後三十年目の命日に当たります。

蛇笏歿後三十年は、即ち『雲母』を継承した私にとって、主宰者としての三十年でもあります。

熟慮熟考の上、九百号とこの三十年を機に、『雲母』を終刊することに致しました。

唐突にして、しかも、ことはただならぬ事柄ですから、本来なら会員・誌友あるいは同人の区別なく、親しくお会いし

て終刊の経緯と理由を具さに申し述べたい気持はやまやまですが、文書をもって御通知せざるを得ない失禮をお許し下さい。

御承知のように『雲母』は、はじめ『キラ、』という誌名で、大正四年五月、愛知県幡豆郡家武村（現西尾市）から発刊されました。その第一巻第一号の巻頭にある「発刊の辞」に附記された「次号よりは先輩名士の選を乞ふことにしてその承諾を得ましたから奮って御投句下さい」とありますように、すでに選者としての蛇笏の了解を得た上でのこと

と思われまふ。

従って第二号から蛇笏選が開始されておりますが、その「雑詠」選には、三河の人達のほか、以前から蛇笏に句稿を送って指導を仰いでいた肥後の吉武月二郎・勇巨人・西島麥南子（麥南）等々の「火の国吟社」の俳人がそろって出句しております。

大正七年、『キラ、』は『雲母』と誌名を改め、号を重ねるに従って誌友は全国的規模となりましたが、三河の人々の懇請により、大正十四年、第十一巻二月号から発行所を蛇笏の膝下に移しました。以後、戦後の一時期を除いて、歿す

るまで『雲母』の責任の一切を負いました。

終戦の年の昭和二十年七月、戦災で印刷所の焼失による休刊と、戦後の混乱期の合併号発刊を除き、『雲母』はおおむね順調に発行されました。その間、昭和二十五年に四百号記念号を、そして同三十四年一月に五百号記念号を発行しております。

昭和三十七年十月三日、蛇笏は『雲母』主宰者のまま、七十七年余ヶ月の生涯を閉じました。蛇笏選の「春夏秋冬」は、昭和三十七年五四三号をもって終りました。

以上は、『雲母』発刊から蛇笏の歿するまでの、おおざっぱな経過です。

以下、私が『雲母』を継承し、三十年をもつて終刊とする理由を申し述べることにいたしますが、戦前の一時期から、たまたま俳句に関わりを持つようになったとはいえ、もともと俳句の結社誌は、常識として一代限りのもの、と考えており

ましたから、蛇笏選の「春夏秋冬」に出句し、ときに句会に出席することはあっても、雑誌そのものに格別の関心はなかった、というのが当時の私の正直な気持ちでした。

しかし、戦争と敗戦は、すべてのおもわくや事情を一変しました。

敗戦後の異様な混乱のさ中、長兄、三兄と相次いで戦死の公報に接し、次兄はすでに昭和十六年病歿しておりましたので、蛇笏の息五人のうち、この世に残ったのは四男の私と弟のふたりだけとなりました。

その間のこまごまとしたことは省略しますが、山村に住むものの世俗一般のことのみならず、『雲母』の発行についても、最早傍観は許されないような状態に立ち到ったのです。

しかし、戦後数年を経ると、たまきはるいのちをうたふふゆこもり冬ぬくく友愛をわがこころの灯
悔ゆる身を忘ぜんとする冬日かな
『雪映』

一生を賭けし俳諧春の燭
句をえらみてはちかむ死か銀懷炉
うたよみて老いざる悲願霜の天
といった感懷を述べる一方、
溪の樹の膚ながむれば夏きたる
『雪映』

降る雪や玉のごとくにランブ拭く
雪山のそびえ幽みて夜の天
蛇笏の句集をひもとくと、昭和二十

五、六年ごろにこのような作品が随処に現れます。耐え難い苦難を超えて、再び俳人としての踏まえどころに立った作品といえましょう。したがって私は、『雲母』の編集を蛇笏の手に戻し、県の図書館に勤務することにした。

ただし、その勤めはたった三年余ヶ月。昭和二十九年には退職しました。はなはだ不真面目、不熱心な勤務ではありましたが、それよりも矢張り老境の蛇笏に『雲母』の編集はあまりにも過重に見受けられたためです。

事実、翌三十年の秋、秋田魁新聞社の招きの旅中に発病。一時は危険な状態

に立ち到りましたが、ともかくもことなきを得、しばらく東京で静養した後、帰郷しました。

図書館退職後は、『雲母』の編集はもとより、昭和三十五年に「作品」欄を創設して私が選に当たることになりました。「春夏秋冬」選の負担を軽減するのが主たる目的でしたが、こんなことも蛇笏と相談した記憶が全くありませんから、随分と勝手なやり方だったな、と改めて忤^こねたるものがあります。考えてみると、『雲母』の将来についても、蛇笏と話し合ったことは、かつて一度もありませんでした。変な親子、といえませんがその通りでしょうが、当時のわが家ではこれが日常。それでお互いなんの不都合も感じませんでした。

蛇笏死去に際し、『雲母』をいかにするか。誌名をそのままにして継承するか。第二は、新しい誌名にかえて発行するか。乃至は、きっぱりと終刊にするか。

耐え得る体力がともなわなかったら、思い通りの選が出来るわけがありません。

また私は、機会あるごとに口に、あるいは小文にも記すように、選は本来出句者の参考にするべきもの。たとい没になっても一ヶ年は手元に控えておいてほしい。一ヶ年経って改めて自作を眺めるとき、選の結果を成程と合点する場合もありましょうが、没になったがこの句には愛着があるというなら、捨て去るべきではない作者の大事な作品である、というのを申し述べて来ました。俳句は自得の文芸と考えているためです。安易な選は、その本義さえ損うことになりす。三十年間、私はこの信念だけは貫いて来たつもりです。

話はやや脇道に外れますが、蛇笏の場合とは全く、私の場合は、誌友の新旧にかかわらず兄弟子とか門弟などという考えをもったことはありません。一度としてそのような言葉を口にした覚えもあ

か。方途はこの三つ。

私は誰にも相談することなく、第一の途をとることにしました。

極めて一方的な決断にもかかわらず、先輩諸友をはじめとして、多くの会員の理解と協力を得られたことは、顧みてまことに感謝に堪えません。

爾来三十年の歳月が過ぎました。世相もいろいろと様変わりしました。

俳句は、世の片隅にひそかに、そしてつましく生きつづけるもの、と観じて来た私などには、昨今の俳句界の様態の変わりようは、ただただ驚くばかりです。三十年前には、私など全く夢想だにしかかった変貌です。

俳句界の在りようはともかく、『雲母』の実態も三十年前とはいっぴか大きく変わりました。

戦前からの『雲母』のひと、つまり、古くからの蛇笏直門と称すべき人々は、いまは指折り数えるほどになってしまいました。戦後もすでに四十七年を経ていることを思えば、致し方ないことかも知

りません。この考えもまたいくばくか前のことと関わりを持つものではないかと考えます。

生来、健康にはあまり恵まれなかった方でしたから、私は久しい間、六十歳あたりまで仕事が出来たらもって瞑すべきだろうとひそかに考えておりましたが、いつか古稀を二年ほど通り過ぎてしまいました。おそらく身近かな人達の介護と友誼の余慶にちがいありません。それなら一層のこと、残された僅かな人生を大事に考え、初心に忠実に従うべきだろうと思います。

こと『雲母』に関していえば、三十年前継承した主宰者としての信念を堅持すること。假にも主宰誌の選が負担となつて、十全に対処出来ないことが自覚されたときは、潔く身をひくほかなないので。この点に関しては、いささかの糊塗も妥協も許されるものではありません。

俳句界の様態がすっかり変ったと思われることのひとつは、俳句誌の異状な増

しませんが、雑誌継承の目的のひとつが、これら先輩諸友が学んだ蛇笏の詩精神と、そして『雲母』の伝統的な友愛を生かすことであったことを思うと、矢張り感なきを得ません。

蛇笏在世のころから較べると、年毎に出句者の数は飛躍的に増加しました。有力有能な誌友もまた枚舉に暇もないほどつぎつぎに生まれたことは周知の通りです。その点、『雲母』の継承は、それはそれなりに意義があったのではないかと考えます。

しかし、出句者の数がどれほど多かろうと、選というものはあくまで一対一の関係にあるもの。特に結社誌においては、そこに一瞬の怠惰も許されない厳しさで対処するのになかったら、主宰の意味はないのではないかと思います。

『雲母』の場合、月々選する作品数は、一万数千から二万句に近いものになりました。ここ数年來、諸雑誌やいくつかの新聞の俳句選をつぎつぎに辞退しましたが、それでもまだ相当の選句数にな

加に加え、一方に主宰者交替と近親者による世襲が数多く、しかもそのことが易々と行われるようになったことです。

これまた、三十年前にはあまり見かけなかった現象でした。特に安易な継承は、俳句の質の向上を望むとき、好ましい流行でないことは云うまでもありません。

その点に関し、私の『雲母』継承にも一端の責任があるのではないかと推察されるとき、正直、私は胸の痛みをおぼえます。ことにここ十年來ほどは、日を逐つて傷口の深まるおもひでした。過去何度か私個人に関するところで、祝賀の催しを計画していただきながら、理由もさだかに申さず、すべてお断りしたのも、根本にこのようならしめられたことがあったためだろうと、改めてにがいおもひが蘇^{よみがえ}って来ます。

それこれを考え併せ、最早その任にあらずとして、今秋をもって『雲母』の終刊を決しました。ながい間考えて考え抜いた上での苦しい決断です。古くから『雲母』一筋に來られた人々はもとよ



'92『俳句』創刊40周年記念BIG対談

俳句・愛情・結社

阿波野青畝
加藤 楸 邨

● 長生きすれば得

加藤 ああ、いらっしやいませ。

阿波野 はじめまして。

加藤 加藤でございます。はじめまして。よくいらっしやいました。大変でしたでしょう。

阿波野 ええ、もう年とりましてね、かきし元気ないですわ(笑)。

加藤 どうぞ、おらくになすってください。お待ちしていましたよ。

阿波野 恐れ入りますけど、前へ、私は耳遠いの。

加藤 私の返事が、大体のろいほうですから、分りにくいときは、どうぞおっしゃってください。どんどんおっしゃっていただいたほうがやりいからです。

阿波野 はい、はい。

加藤 じゃあ、よろしく願います。

阿波野 先生の俳画集ぜんぶ拝見しておわってね。あれ、私が序文を少し書くんだそうですね。

阿波野 私の俳画集に楸邨先生がまえが

り、生涯の場として『雲母』を選ばれた方達。そしてまた有力な俳人としてめきめき頭角を現した新鋭の諸友。これらすべての人達が突然の終刊をどのように受け止められるだろうか、と考えるとき、私はいまお応えする術を知りません。わが身の不甲斐なさを思うにつけても、いまはまだ深く頭をたれるほかはありません。

それはそれとして、終刊までのこれらの順序を申しますと、九百号は特別号として『キラ、』時代の「雑詠」欄、ついで「春夏秋冬」欄から「作品」欄の、各月の巻頭句をすべて収載することになります。そして最後の臨時増刊として全会員に代表作(自選五句)を求め、『新編雲母句集』を刊行する予定であります。大正期に刊行された『雲母句集』『続雲母句集』の二著に呼応する一集とするためです。

御承知のように、山梨県立文学館で

は、来る十月三日の蛇笏忌をオーブンの日として約二ヶ月間「歿後三十年記念飯田蛇笏展」を開催することになっております。十月十日、十一日の雲母全国大会開催もまたこの記念展に添うものであることは申すまでもありません。あるいはまた、それと前後して催される九月の「第十回 神奈川雲母の会」と、十一月四国松山での「四国・中国雲母の会」は、予定の通り実施されます。共々、多くの御参加を期待致します。

尚、『雲母』終刊後も、俳句から離れるようなことは、私はさらさら考えてはおりません。むしろ、あらたな決意で句作に勵む所存でおりますが、『雲母』に代わる新誌については、広瀬直人・福田甲子雄両氏を主軸として刊行されることになりましよう。その詳細は十分検討した上で成案が発表されることになっております。

『雲母』終刊後も、各地の俳句会や一泊の吟行会等には、私も進んで参加したいと考えております。参加者何百人という

句会とちがい、親しく膝を交えた一座の交情には、大きな句会では得られない新鮮さと愉しさがあるのではないかと思います。

以上、思いのいくばくも記し得ませんが、是非共意のあるところを賢察していただきたいと、切に念願致します。

この終刊の辞を記し終って、私はいま蛇笏を思い浮べております。そして「終刊は是か否か」を問うてみました。

蛇笏の面上にかすかな笑みをおぼえたとき、窓外に仰ぎ見る後山のみどりがひとしお瞭かに思われることでした。

(原文のまま。平成四年「雲母」七月号より)



句集 黎 明

現代俳句叢書Ⅲ⑦

中西 錦 士

定価2600円

角川書店